

令和 6 年 6 月 17 日現在

機関番号：11601

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K00213

研究課題名（和文）ノルウェーのコミュニティ音楽療法を基軸としたPOLYFONプロジェクトの研究

研究課題名（英文）POLYFON Knowledge Cluster on Music Therapy in Norway : Focusing on Community Music Therapy Practice

研究代表者

杉田 政夫 (Sugita, Masao)

福島大学・人間発達文化学類・教授

研究者番号：70320934

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：スティーゲ他著(2019)『コミュニティ音楽療法への招待』杉田他訳（風間書房）の邦訳出版を皮切りに、ノルウェーのコミュニティ音楽療法の理論、実践、音楽療法士養成カリキュラム、POLYFON知識クラスターに関わる数多くの学会発表、論文作成、シンポジウム、講演を行ってきた。第22回日本音楽療法学会大会における大会企画シンポジウム「コミュニティでの音楽療法を考える」を筆頭に、日本におけるコミュニティ音楽療法の理論的・実践的な展開に、一定寄与してきたものと思量する。2023年9月の調査では、POLYFONが恒久的機関として現在も継続しており、実践の範囲を学校にまで拡張していることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

地域に根差した音楽療法として国際的な注目を集めているコミュニティ音楽療法は、音楽活動を通じた障害者、高齢者、移民・難民等の社会参画、健康増進、文化的生活の実現に寄与しつつ、コミュニティ自体の改良、活性化にも寄与する。社会的弱者の孤立や地域文化の衰退が問題視されている日本においても、重要な意義を持つ。POLYFONプロジェクトの実態解明は、国家資格化を目指して音楽療法士の質・量双方の充実を目指す日本の音楽療法にも重要な示唆をもたらすであろう。とりわけ日本ではコミュニティ・ベースの音楽療法や、実習先と大学との連携に課題が指摘されており、本研究の成果は、そこからの脱却の方途を示すものでもある。

研究成果の概要（英文）：Starting with the publication of the Japanese translation of Stige, B. et al. (2019) Invitation to Community Music Therapy, translated by Sugita, M. et al. (Kazama Shobo), our research group has presented numerous conferences, written papers, symposia and lectures related to Norwegian community music therapy theory, practice, music therapist training curriculum, and POLYFON knowledge cluster. We believe that we have made a certain amount of contribution to the theoretical and practical development of community music therapy in Japan, starting with the conference planning symposium "Considering Music Therapy in the Community" at the 22nd Annual Meeting of the Japanese Society of Music Therapy.

The September 2023 survey revealed that POLYFON has expanded its target areas and is still ongoing as a permanent institution, extending the scope of practice to include schools.

研究分野：音楽教育学

キーワード：コミュニティ音楽療法 POLYFON ブリュンユルフ・スティーゲ ノルウェー 社会正義 音楽療法士養成カリキュラム 芸術的市民権 ヴィーゴ・クリューガー

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

近年、地域に根差した音楽療法として国際的な注目を集めている「コミュニティ音楽療法」は、音楽活動を通じた障害者、高齢者の社会参画、健康増進、文化的生活の実現に寄与しつつ、コミュニティ自体の改良、活性化にも寄与している(スティーゲ 2008)。社会的弱者の孤立や地域文化の衰退が問題視されている日本においても、重要な意義を持つ。とりわけ 2018 年、つくば市で開催された世界音楽療法学会において、諸外国における同音楽療法の研究、実践の圧倒的な充実ぶりを受け、日本国内でも関心が急速に高まりつつあった。

申請者らは 2014 年度より研究グループを組織し、コミュニティ音楽療法の先進国、ノルウェーにおいて、同音楽療法の理論的指導者、ブリュンコルフ・スティーゲ氏(ベルゲン大学教授)へのインタビュー調査や、氏のコーディネートによる病院、施設等での参与観察を重ね、そのアクセシビリティの解明に取り組んできた(杉田他 2014,2015,2017)。その過程において現在、ノルウェーの音楽療法が大きな転換点を迎えつつあることが明らかになった。ノルウェーではコミュニティ音楽療法の国際的な成功を受け、国が定める精神病治療等のガイドラインにおいて音楽療法が強く推奨されるに至り、国民的期待が寄せられ、ヘルスケア制度における認定化への機運も高まっていた。しかしながら、現状では音楽療法士数がノルウェー国内で 300 人程度しかおらず、北欧諸国が重んじるアクセスの平等性を担保するには少なくとも 1200 人まで増やさなくてはならないという状況であった(杉田他 2017)。

この問題を解決すべく、ベルゲン大学グリーグアカデミー音楽療法研究所(GAMUT)、同大学音楽療法学科の学生教育、地域の病院や福祉・文化施設、財団や企業等のリソースをネットワーク化することで、優れた音楽療法士を急ピッチに養成するために立ち上げられたのが、POLYFON プロジェクトであった。POLYFON とはノルウェー語の頭字語で、P(人々)O(組織)L(地域)におけるクライアントと、F(市民)O(公共)N(企業)といったエージェント、ステークホルダーとをつなぐ、Y(専門職者の役割)という意味である。ポリフォニー(多声音楽)のノルウェー語であり、多様な声は平等に扱われ、共にある場所へと向かっていくことを暗示するメタファーでもある。

POLYFON プロジェクトの実態解明は、国家資格化を目指して音楽療法士の質・量双方の充実を目指す日本の音楽療法にも重要な示唆をもたらすものであると思し、本研究に着手した。

2. 研究の目的

本研究は以下 3 つを目的とする。第 1 に、ノルウェーにおけるコミュニティ音楽療法に関する最新の理論と実践動向について、スティーゲ氏を始めとした研究者へのインタビュー、及び病院、文化・福祉施設、刑務所、学校等への訪問調査や参与観察を通して明らかにする。第 2 に、資料の調査やインタビューを通して POLYFON プロジェクトの特質や進捗状況、大学と実践現場との連携の仕組み、音楽療法士養成教育におけるカリキュラム改革の動向について解明する。第 3 に、これらノルウェーの先例に学びつつ、日本における地域の社会・文化的コンテクストに符合したコミュニティ音楽療法の実践プログラムを構築する。また、その様な実践を展開可能な音楽療法士をいかにして養成するかについて考究する。

3. 研究の方法

本研究では、ノルウェーのコミュニティ音楽療法の最新理論、実践状況、音楽療法士養成大学のカリキュラムとその改革について調査すると同時に、POLYFON プロジェクトの理論的背景と動向、実習の仕組みについて分析する。

同国における音楽療法のヘルスケア制度への認定化の動向は、ベルゲン大学音楽療法学科はもとより、もう一つの養成校であるノルウェー国立音楽大学の「音楽と健康コース」にも影響を及ぼしている。療法士養成のカリキュラム改革や認定化への対応について、スティーゲ氏やエヴェン・ルード氏らへのインタビュー調査をもとに検討する。

それらの事例に学びつつ、日本の社会・文化的コンテクストに合致したコミュニティ音楽療法の実践プログラムを開発し、また音楽療法士養成の教育やカリキュラムの在り方について考察する。

4. 研究成果

○2019 年度

2019 年度は、6 月末にスティーゲ、オーロ著『コミュニティ音楽療法への招待』の邦訳書を風間書房より刊行した(スティーゲ他著/杉田他訳 2019)。当該領域の研究者や実践者に寄贈し、意見交換することで、議論を深化させることができた。

8 月末には、実地調査を実施した。同年 8 月 23 日はドイツのビラベックに多田・フォントゥピッケル・房代氏を訪ね、ドイツの音楽療法事情やご自身の実践について、詳細なインタビュー調査を行った。26 日はノルウェーのサーロムサンに音楽社会学者の原真理子氏を訪問し、ノ

ルウェーの音楽（療法）研究の動向やご自身の研究に関して聞き取り調査を実施した。27日にはノーダーレン福祉施設にてトム・ネス氏による移民の言語習得を主眼に据えた音楽療法実践を観察した。29日はベルゲンの保育所の実践、FANA文化センターにおける児童福祉領域の実践を視察した。30日にはスティーゲ氏より、POLYFONの進捗状況についてレクチャーを受け、意見交換した。POLYFONの成果もあり、ベルゲン市内の地区精神医療センターすべてにおいて、音楽療法士が採用されたことが明らかになった。また同プロジェクトは2018年から第2期へと移行し、参加団体も増加していることが明らかになった。

日本音楽療法学会学術大会（9月22日）にて、訳書『コミュニティ音楽療法への招待』から日本の音楽療法実践を展望する内容の自主シンポジウムを持った。日本音楽教育学会50周年東京大会（10月19日）では、ノルウェーにおける刑務所でのコミュニティ音楽療法や療法士養成カリキュラムに関する口頭発表を行った。

年度末に福島大学にて開催を予定していたコミュニティ音楽療法の実践講座は、新型コロナウイルスの感染拡大を受け、中止せざるを得なかった。また、名古屋芸術大学音楽総合研究所の音楽療法実践グループ「マイエ」に長年通う利用者と保護者を対象に、共に音楽活動をしながら、併せてインタビュー調査を実施する予定で準備を進めていたが、これも新型コロナウイルス問題で、中止を余儀なくされた。

○2020年

同年はPOLYFONの動向を探るべく、スティーゲ氏への聞き取りや、ベルゲンでのコミュニティ音楽療法実践の参与観察を予定していたが、コロナ禍につき実現に至らなかった。ゆえにこの期間は、これまでの実地調査や参与観察で得たデータの整理、分析、考察に専念することとした。具体的には、コミュニティ音楽療法の諸特性に関するスティーゲ氏の詳細な解説、及びビオルグヴィン精神医療センター、FANA文化センター、U82コミュニティセンターにおけるコミュニティ音楽療法実践のアクチュアリティについて、論文にまとめた（杉田他 2021）。

また、日本型のコミュニティ音楽療法実践やPOLYFONプロジェクトを構想するため、協働で実践を行っている北名古屋社会福祉協議会の担当者にインタビュー調査を実施した。さらに関連研究として、音楽療法実践における自閉症児Aとの臨床即興演奏の分析を通し、音楽療法士側のA児の捉え方、ひいてはそこから導かれる音楽療法の視座の転換について検討する論文を執筆した（伊藤他 2021）。

○2021年

同年もノルウェーにてスティーゲ氏にPOLYFONの動向をインタビュー調査し、併せて連携している文化・福祉施設等の参与観察を実施予定であったが、新型コロナウイルスの感染拡大の影響を受け、見送らざるを得なかった。したがって当該年度も、これまでの実地調査や参与観察で得たデータの整理、分析、考察に専念した。具体的には、ベルゲンのヴォルグヴィン刑務所の訪問調査、勤務する音楽療法士シェティル・ヒョルネヴィック氏へのインタビュー、出所後の元受刑者の音楽活動を支える音楽療法士、ラース・テューアスタッド氏が携わるロックバンド、エヴァンゲリウムの参与観察の調査結果をまとめ、論文を作成した（杉田他 2022）。

また、日本の地域に符合したコミュニティ音楽療法を構想するため、協働で実践を展開している北名古屋社会福祉協議会との音楽活動「親子 音楽を楽しむ会」のこれまでを省察し、実践コミュニティの視座等から検討した。諸成果を日本音楽療法学会学術大会での自主シンポジウムで公表し、論文にまとめた（伊藤他 2022）。さらに、共同研究者である柴田朋子氏が「仕事」をテーマに構想し、個別音楽療法のクライアント、保護者、バリスタらと協働で実践した「実験カフェ」について、コミュニティ音楽療法の視角から分析、考察した論文を作成した（柴田他 2022）。

○2022年

引き続きコロナ禍の影響でノルウェーでの実地調査ができなかったため、国内において実施可能な研究を進めた。

理論研究としては、第1に、ノルウェーにおいて音楽療法士資格を付与しているベルゲン大学とノルウェー国立音楽大学の療法士養成カリキュラムと教育について、過去にスティーゲ氏、ロード氏、トロンダーレン氏、クヴァメ氏らに実施したインタビュー調査をもとに、論文にまとめた（杉田他 2023）。第2に、第22回日本音楽療法学会学術大会の大会企画シンポジウム「コミュニティでの音楽療法を考える」における指定討論者として、震災後の音楽療法実践や社会福祉協議会における音楽療法について、スティーゲのコミュニティ音楽療法理論やデリダの正義論の視角から分析を加え、意義と課題を提示した。第3に、近年におけるコミュニティ音楽と学校音楽教育において重要視されている社会正義の理念と実践及びその展開を、文献調査を通して明らかにし、日本音楽教育学会第53回大会で口頭発表した。第4に、大越良子氏（福島県立小高産業技術高等学校）との共同による、東日本大震災後の被災地における音楽実践の在り方に関する研究も、継続して推進した。

実践的には、北名古屋社会福祉協議会、及び名古屋芸術大学音楽総合研究所音楽療法部門（マイエ）と連携し、コミュニティ音楽（療法）を実施した。また福島大学地域未来デザインセンターと協働し、福島県浜通りにおける被災地の子どもたちを対象としたコミュニティ音楽実践を展

開した。

○2023年

同年は、コミュニティ音楽療法の理論的指導者であるスティーゲ氏が近年重要視する「芸術的市民権」と「社会正義」との関係を探究し、笹野恵理子・学校音楽文化論編著『学校音楽文化論 人・モノ・制度の諸相からコンテクストを探る』（東信堂、2024年）の第1章「学校音楽教育と社会正義 新自由主義への対抗」を執筆した。また大越良子氏との共著で、震災後の音楽部活動とその長きにわたる省察について、第14章に「震災と学校音楽教育 非常時の合唱部活動経験がもたらしたもの」と題して論じた。さらには、これまでのノルウェーにおける実地調査の成果を、第23回日本音楽療法学会学術大会の大会企画講習会（オンデマンド）において、「ノルウェーのコミュニティ音楽療法 理論・実践・教育」のタイトルで講演した。

コロナ禍が一定落ち着いたことを受け、ようやく2023年9月19日～22日まで、ノルウェー・ベルゲンにて実地調査を再開することができた。ベルゲン大学グリーグアカデミー音楽療法研究センターにおけるスティーゲ氏、ヴィーゴ・クリューガー氏ら研究者へのインタビューの他、病院、学校、文化施設、福祉施設でのコミュニティ音楽療法実践や、POLYFON知識クラスターに関わる実践の参与観察を行った。POLYFONがプロジェクト期間を終え、2021年度からは範囲をノルウェー全国に拡大し、恒久的機関となったことが分かった。また近年、STALWARTSプロジェクトを始め、コミュニティ音楽療法は、理論と実践の範囲を学校（音楽教育）にまで拡張していることが明らかになった。

実践的には、北名古屋市社会福祉協議会、名古屋芸術大学音楽療法グループ「マイエ」と連携してのコミュニティ音楽（療法）「親子 音楽を楽しむ会」や、福島大学地域デザインセンターと協働しての被災地音楽支援（「五感を刺激する音楽ワークショップ@双葉幼稚園」）を開催した。コロナ禍で4年間の中断を余儀なくされた、「マイエ」に長年通う利用者と保護者を対象としたインタビュー調査であるが、ようやく2024年3月17日に実施することができた。これらについても今後、論文にまとめていく予定である。

研究期間全体を通じ、スティーゲ他著、杉田政夫他訳『コミュニティ音楽療法への招待』風間書房、2019年の邦訳出版を皮切りに、ノルウェーのコミュニティ音楽療法の理論、実践、療法士養成教育、POLYFON知識クラスターに関わる数多くの学会発表、論文作成、シンポジウム、講演を行ってきた。第22回日本音楽療法学術大会における大会企画シンポジウム「コミュニティでの音楽療法を考える」を筆頭に、日本におけるコミュニティ音楽療法の理論的・実践的な展開に、一定寄与してきたものと考えている。現在、2023年度のノルウェー調査を論文に、また科研期間中の成果を著書にまとめるべく、執筆を進めているところである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計12件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 9件）

1. 著者名 青木真理	4. 巻 8
2. 論文標題 切れ目ないキャリア形成支援についての一考察	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 福島大学学校臨床支援センター紀要	6. 最初と最後の頁 11-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 杉田政夫・伊藤孝子・青木真理	4. 巻 34巻2号
2. 論文標題 ノルウェーにおける音楽療法士養成課程の教育とカリキュラム：ベルゲン大学とノルウェー国立音楽大学への訪問調査	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 福島大学地域創造	6. 最初と最後の頁 5 - 16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 青木真理	4. 巻 6号
2. 論文標題 スクールカウンセラー活動の基本についての私論	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 福島大学人間発達文化学類附属学校臨床支援センター紀要	6. 最初と最後の頁 1 - 8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 杉田政夫・伊藤孝子・青木真理	4. 巻 33巻2号
2. 論文標題 ノルウェーにおけるコミュニティ音楽療法の実践 - 刑務所内、及び出所後の音楽活動	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 福島大学地域創造	6. 最初と最後の頁 pp.5 - 15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 伊藤孝子・柴田朋子・杉田政夫・田端敬記・安田智・澁木和代	4. 巻 第43巻
2. 論文標題 社会福祉協議会と音楽療法士の協働 持続可能な実践コミュニティの実現を目指して	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 名古屋芸術大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 柴田朋子・伊藤孝子・杉田政夫	4. 巻 第43巻
2. 論文標題 音楽療法士とクライアントという関係性と場を捉えなおす試み コミュニティ音楽療法の観点から再考する	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 名古屋芸術大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 青木真理	4. 巻 16
2. 論文標題 臨床心理的支援を行うセラピストの態度について	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 福島大学心理臨床	6. 最初と最後の頁 pp. 1 - 7
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高橋純一・谷雅泰・青木真理	4. 巻 5
2. 論文標題 知的障害者に対する青年期教育の多様性ー高等部本科から福祉型専攻科への教育課程の接続に関する議論	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 福島大学人間発達文化学類附属学校臨床支援センター紀要	6. 最初と最後の頁 pp.37 - 44
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 杉田政夫・伊藤孝子・青木真理	4. 巻 32巻2号
2. 論文標題 ノルウェーにおけるコミュニティ音楽療法の今日的展開に関する研究：ステージへのインタビュー及び実践現場への訪問調査を中心に	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 福島大学地域創造	6. 最初と最後の頁 37-53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 伊藤孝子・柴田朋子・杉田政夫	4. 巻 第42巻
2. 論文標題 自閉症児Aの反復演奏に対する音楽療法士の捉え方の転換について 転機となった臨床即興プログラムの分析を通して	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 名古屋芸術大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 29-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 青木真理	4. 巻 第2巻
2. 論文標題 スクールカウンセラーガイドブック作成の試み	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 福島大学人間発達文化学類附属学校臨床支援センター紀要	6. 最初と最後の頁 113-120
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 青木真理・谷雅泰	4. 巻 第2巻
2. 論文標題 デンマークの若者支援の新しい制度 - KUIについて	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 福島大学人間発達文化学類附属学校臨床支援センター紀要	6. 最初と最後の頁 45-53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計14件（うち招待講演 5件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 杉田政夫
2. 発表標題 ノルウェーのコミュニティ音楽療法 理論・実践・教育
3. 学会等名 日本音楽療法学会（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 杉田政夫
2. 発表標題 音楽教育哲学は新自由主義にどう対抗するのか 社会正義の理論的展開
3. 学会等名 日本音楽教育学会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 杉田政夫
2. 発表標題 音楽教育哲学における「社会正義」論の展開 - The Oxford Handbook of Social Justice in Music Educationの検討を中心に
3. 学会等名 日本音楽教育学会第53回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 大越良子・杉田政夫・伊藤孝子
2. 発表標題 東日本大震災後における合唱部活動経験の実相と認識の変容 - 被災地の高校の合唱部卒業生に対する追跡インタビューを中心に -
3. 学会等名 日本音楽教育学会第53回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 伊藤孝子・渡邊恵里・池田憲治・野路恵美・杉田政夫
2. 発表標題 コミュニティでの音楽療法を考える
3. 学会等名 第22回日本音楽療法学会学術大会 大会企画シンポジウム(招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 伊藤孝子・安田智・田端敬記・柴田朋子・杉田政夫
2. 発表標題 社会福祉協議会と音楽療法士の協働について -持続可能な実践コミュニティの生成を目指して
3. 学会等名 第21回日本音楽療法学会学術大会 自主シンポジウム
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 青木真理・原真理子・伊藤孝子・杉田政夫
2. 発表標題 リンドグレーンお茶会 コロナ禍の中で生まれた多世代間・多文化間交流の実践
3. 学会等名 アートミーツケア学会2021年度大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 大越良子・杉田政夫・伊藤孝子
2. 発表標題 東日本大震災後の合唱部活動経験を検証する試み 合唱部卒業生のインタビューを通して
3. 学会等名 日本音楽教育学会2021年度東北地区例会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 青木真理
2. 発表標題 支援活動委員会シンポジウム企画「コロナ禍での心理的な困難 新型コロナは“こころ”にどんな影響を与えたか -」において「コロナ禍 の中でのスクールカウンセリングー福島県の場合ー
3. 学会等名 日本心理臨床学会第40回大会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 伊藤孝子
2. 発表標題 ノルウェーの音楽療法実践の事例紹介
3. 学会等名 2021年度総合病院精神学科学術大会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 伊藤孝子
2. 発表標題 コミュニティ音楽療法理論 - ノルウェーの実践風景の紹介も交えて
3. 学会等名 2021年度 日本音楽心理学音楽療法懇話会・講習会（359回）（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 伊藤孝子・杉田政夫・柴田朋子・吉田豊・阪上正巳
2. 発表標題 自主シンポジウム「『コミュニティ音楽療法への招待』から日本の音楽療法を展望する 理論と実践に橋を架ける試み」
3. 学会等名 日本音楽療法学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 杉田政夫
2. 発表標題 ノルウェーのコミュニティ音楽療法に関する総合的研究 理論・実践・教育
3. 学会等名 日本音楽教育学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 伊藤孝子
2. 発表標題 「音楽療法における専門性と今後の医療との連携について - 音楽療法士養成大学教員の立場から - 」 シンポジウム「医療の中での音楽療法士の位置付け」
3. 学会等名 日本音楽医療研究会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 笹野恵理子・杉田政夫・西島千尋他	4. 発行年 2024年
2. 出版社 東信堂	5. 総ページ数 368
3. 書名 学校音楽文化論 一人・モノ・制度の諸相からコンテクストを探るー	

1. 著者名 青木真理	4. 発行年 2024年
2. 出版社 明治図書	5. 総ページ数 143
3. 書名 スクールカウンセラーのための仕事術 はじめて学校で働くための手引き	

1. 著者名 ブリュンユルフ・スティーゲ、レイフ・エドヴァルド・オーロ、杉田政夫、伊藤孝子、青木真理、谷 雅泰、菅田文子	4. 発行年 2019年
2. 出版社 風間書房	5. 総ページ数 506
3. 書名 コミュニティ音楽療法への招待	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	杉田 孝子 (伊藤孝子) (Ito Takako) (20367676)	名古屋芸術大学・芸術学部・教授 (33913)	
研究分担者	青木 真理 (Aoki Mari) (50263877)	福島大学・人間発達文化学類附属学校臨床支援センター・教授 (11601)	
研究分担者	谷 雅泰 (Tani Masayasu) (80261717)	福島大学・人間発達文化学類・教授 (11601)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	柴田 朋子 (Shibata Tomoko)	名古屋芸術大学	
研究協力者	大越 良子 (Okoshi Ryoko)	福島県立小高産業技術高等学校	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------